

日本共産党は、宗教をまったく否定していません。それどころか、多くの仏教系・キリスト系の宗教者たちと懇談し、反戦・護憲など、平和な社会実現のために一緒に活動しています。共産黨員の中にも、宗教を信仰する人たちが大勢います。

日本共産党と創価学会は、昭和 49 年に作家、松本清張の仲介で、「創共協定」(相互不可侵・共存を約した協定)を 10 年間の約束で結びました。しかし、自民党との関係悪化を恐れた公明党の大きな反発や、創価学会員による、当時の日本共産党委員長であった、宮本顕治宅盗聴事件などの犯罪行為などによる創価学会の一方的な不正な行為と思惑などにより、協定は、翌年の公表とほぼ同時に死文化しました。

現在の状況は、日本共産党が創価学会員の「言論出版妨害事件」や、政教分離での「公明党と創価学会の関係」など、創価学会と公明党の社会的役割と不正を追求してきたことと、関係していると思われます。また、組織の結束を高めるため、創価学会の社会的役割と不正などを追求する人間や組織を仏敵と称し、『身近な敵』としていることは、多くの書籍やメディアで明らかにされています。

参照サイト

JCP サイト http://www.jcp.or.jp/ranking/page/329_inc.html

JCP サイト http://www.jcp.or.jp/akahata/aik4/2006-04-28/2006042814_01_0.html

大阪府党员 ブログ <http://blog.goo.ne.jp/urmt/e/a28e4ba911ab5a7f32cb159b2b40d162>

日本共産党は、「宗教はアヘン」などとは言っていません。「宗教はアヘン」という言葉は、カール・マルクスが、「宗教上の不幸は、一つには現実の不幸の表現であり、一つには、現実の不幸に対する抗議である。宗教は、悩める者のため息であり、心なき世界の心情であるとともに精神なき状態の精神である。それは、民衆のアヘンである」と書いたことにあります。この文面からも明らかなように、アヘンを単純に「毒薬」という意味で使っているではありません。アヘンは乱用すれば有害ですが、アヘンの成分から作られるモルヒネは、鎮痛剤として使われています。

アヘンという言葉には、宗教に対するマルクスの批判もこめられています。宗教は、民衆に「あきらめと慰め」を説き、現実の不幸を改革するために立ち上がるのを妨げている、という意味です。これは、当時のヨーロッパでキリスト教が、国王権力と支えあう関係になって、専制支配のもとで苦悩する民衆に忍従を説いていたという、時代背景が起因しています。マルクスの「宗教はアヘン」という言葉は、そうした宗教の役割を批判したものでした。